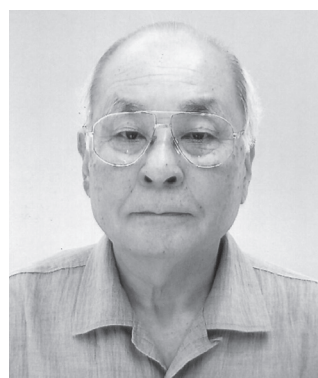




2010年3月28日

いま起きつつあること…

村上伸先生の
平和講演会から



村上伸先生の講演「死刑をどう考えるか」を連続してかわら版でお伝えしてきましたが、今回で最終回となります。

生命の畏敬

第一次世界大戦後、世界を根本から立て直さなくてはな

らないというところから、「生命の畏敬」という考え方が現れました。カール・バルトは、「人間の生命は神様のもの、神様から貸し与えられているものであるゆえに、生命は畏敬されねばならず、あらゆる不遜な否定や抹殺から保護されねばならない」と、「国家の正常な秩序としての死刑」を否定しました。

理由は①見せしめとしての刑罰という考え方に対して死刑には威嚇効果がない。②神の応報の義はすでにキリストの十字架において達成されている。人間の罪は覆われているので、死刑は必要ない。③死刑は、教育刑としての刑罰に矛盾する。——このようにバルトは生命の畏敬の原則から死刑反対を主張しますが、一方で限界状況における例外はあり得るとも述べています。

厳罰化に向かう社会

現在、日本のメディアでは、治安の悪化ということが事実反してことさらに強調されています。ですが実際は悪くなっているのではありません。

2007年の殺人件数は1199件と戦後最少で、最多は1954年の3081件、人口が少なかったことを踏まえれば今の約四倍です。

「治安が良くなっている」という情報が報道されないのは、不安や恐怖を煽ったほうが政治家やメディアにとって都合がよいからです。こうした世相の中で、怯え・不安・恐怖が強くなって、その結果、厳罰化が進み、死刑判決が増え、執行数も増えているのです。

2000年に少年法も改定されました。少年による事件が凶悪化し、なおかつ多発しているとの理由で厳罰化されましたが、実際には増えておらず、少年による殺人事件が最も多かったのは1961年でした。事実反して、治安の悪化が言われるのは、「悪い奴は生かしておくな」という暴力的な考え方を拡げるためではないか、とされます。それは日本が武装し戦争の出来る国へと向かう論理とも結び付く。不安を煽り、恐怖をあり、悪い奴はやつつけろ



2010年3月28日

いま起きつつあること…

という論理、これは個人的には死刑、国際的には戦争に結びつく考えなのです。

質疑応答より

裁判員制度が始まった今、私たちも、国家の名において行われる「死刑」という殺人に手を貸すことになるかもしれない。被害者の心を思うと難しい問題ではありますが、死刑で本当に解決がつくのか、辛い葛藤を経たのち加害者と和解できた方たちがあ

感想

死刑制度を存続させてきた日本が、廃止に不安があるのは無理もないことです。今日、犯罪件数自体は減っているとしても、無差別な殺傷やいじ

めや自殺など、人間関係の希薄さがもたらす痛ましい事件は後を絶ちません。しかし厳罰化で社会が良くなるものではなく、むしろ、生命が畏敬される社会となっていくことが重要なのだと教えられました。

不安や恐怖が社会を取り巻いている限り、死刑廃止は難しいでしょう。ですから、ただ死刑廃止を訴えるのではなく、教育刑を徹底していくことも必要だと思っています。過失を犯してしまった人が、新しい環境の中で自分を見つめなおし、過ちや被害者に対する心からの悔い改めをもつことができるようなプログラムがなくてはなりません。10年、20年…と時間はかかったとしても、歪められ傷ついた人生観が癒されるような働きかけが備えられることが大切だと思います。

◆推薦書

ホセ・ヨンバルト『死刑はどうして廃止すべきなのか』（聖母の騎士社、2008年、5250円）



EUをはじめ、世界の潮流は、確実に「死刑廃止」に向かっている。しかし、わが国では多数の支持により死刑が続いている。カトリック司祭の法学者が、日本の死刑制度に疑問を投げかけ、その問題点を突く。

——機知に富み、読みやすい内容です。著者は「私たちが死刑というものの実際を知らないゆえに、この非人道的な行為が残されている」と主張します。まず事実を知ることから、そして犯罪や刑罰は道

徳の問題であるがゆえに、それをどのように評価すべきかという、原理や状況についても考察がなされています。